



# お金と人間の歴史に関する研究

人文科学系・人文社会学領域

村上 麻佑子

准教授

MURAKAMI Mayuko

博士(文学)(東北大学)

■研究キーワード 人類史, 気候変動, 装飾貨幣, 鑄造貨幣

■主な所属学会 日本思想史学会 / 日本経済思想史学会 / 史学会

■研究者総覧 <https://koto10.nara-wu.ac.jp/profile/ja.7970d21b9759d25d520e17560c007669.html>



研究者総覧

## 研究概要

ヒトはなぜお金を生み出したのでしょうか。人類史の中で、お金とヒトのあり方はどのように変化してきたのでしょうか。

お金と人間の歴史について古代日本を中心に、以下3つの視点で、文献学の立場から研究を行っています。さらに飢饉や疫病などの非常時と古代国家による貨幣政策の関係を理解するため、気候変動に関わる理系データも用いつつ、分析しています。

1. 装飾貨幣について
2. 古代国家と貨幣の関係について
3. 貨幣と神仏の関係について

その他、原子力による日本の国土開発史や、聖地学研究として日本における霊地・霊場の成立過程についても検討しています。



## アピールポイント

1. お金と人間の歴史の始まりは、約10万年前の現生人類が装飾品を生み出した段階に求めることができると分析しています。これまでお金の始まりは金属貨幣の成立、あるいは信用の成立に求められてきました。本研究では貨幣は、使用価値を持たない物に、不特定多数の人々が高い価値を見いだすことで成り立つものと論理化した上で、その構造が装飾品において始まるとしました。この研究を通して、10万年前以来我々は貨幣社会を生きてきたという新しい歴史の見方が提示できると考えています。

2. 装飾貨幣の他、紀元前7世紀頃からは中国、地中海、インドの古代国家によって次々に金属貨幣が創出されていきます。古代中国の文献を中心に、その発行のタイミングを調査すると、飢饉や疫病などの非常時に、農業政策の施行とともに、貨幣を発行していたことがわかりました。日本でも古墳時代以降、飢饉や疫病という非常時に新たな貨幣が創出される傾向が同じく確認され、その中で碧玉製装身具から布帛、銭貨へと貨幣のかたちが変化していくことを、本研究で論じています。かつ日本の8~9世紀には、気候変動によって発生した飢饉などの非常時に、高い価値を付与した新銭を発行する傾向があることも、当時の湿度データを用いながら分析しています。

3. 日本社会の中で、お金とカミがどのように関わってきたのか。従来、お金はもともとカミに捧げられるものであったのが、人である王に貢納されるものへ変化したと考えられてきました。しかし、古代の文献を検証すると、お金とカミが関わる事例はあまり見られません。お金と神仏が恒常的に関わるようになるのは、8世紀以降であり、さらに10世紀頃から神仏へお金を捧げる行為に積極的な意味が付与されていったとし、両者の関係について新たな捉え方を模索しています。